大草野地区地域コミュニティ運営協議会　　事務局だより　　R6　第 1 号

令和6年4月30日
TEL･FAX　0954－66－3113
発行責任者　江 口 常 雄

きずな

住みよい元気な緑の郷大草野

入学式　校長先生から「3つの自分でできるかな？」　4月10日（水）

前日から急に冷えた空気が、そのまま体育館の中に居座っていて、顔を合わせると「今朝は寒くなったですね。」の挨拶から始まりました。今日は、20人の児童たちの学校生活がスタートする記念の日です。

今年も、パパママカメラマンがスマホなどを片手に、実に嬉しそうです。 新入生の入場で出迎えの拍手が会場に満ちて、桜の花に続いて誰もが笑顔の満開です。 開式になり、国歌斉唱のあと教育委員会からの告辞がありそのあと渡邊校長先生が式辞を述べられました。

今年も、校長先生は「3つの自分一人でできるかな？」のお話しをされました。 1つ目は、「朝、自分一人で起きることができるかな？」。2つ目は、「洋服を自分で着ることができるかな？」。3つ目は、「お友達と仲良くすることができるかな？」でした。 さすがに、「朝一人で起きれるかな？」に手をあげた子は数人でしたが、「お友達と仲良くできるかな？」には、どの子も元気いっぱいに手をあげていました。

この3つのできるかな？は、毎日を元気に、楽しく過ごすためにどれも大切なことです、これから頑張って全部できるようになるといいですね。 渡邊校長先生は、演壇に立ったとき、自己肯定感と自己有用感のことをよく話されます。

ほんの些細なことでも、子ども達が何かを成し遂げた時は、大人が忘れずにほめてあげること、その積み重ねで子どもは自分のしたことが誰かの役に立っていると思い、自信へとつながっていきます。 日々の忙しい生活の中では難しいことかもしれませんが、できるだけ目線の高さを子どもと同じくして過ごしてみてください。 私の子育てに関する後悔は、外に出ていくことばかりに追われて、「子どもと話す時間が少なかったなぁ！」ということです。 先を見れば長く感じても、振り返ればあっという間です。

保護者の皆さん、子どもの成長を充分に楽しんでください。　ご入学、おめでとうございます。

5年ぶりに　令和5年度　総会　を開催しました。（4月21日：日）

事務局を担当して5年目にして初めての総会の開催です。 これまでの様子を知らないので、代議員の皆さんが5年度の事業や予算執行にどのような評価をしていただくのか、不安もありましたが、議長を務めていただいた益世会会長の田中議長の円滑な進行で、全議題を無事に承認していただくことができました。みなさん、有り難うございました。

代議員実数　４８名、出席者数１６名、委任状提出者数２６名、欠席者６名　で規約上、有効な出席数が得られました。 初めて、日曜日の昼間の時間帯の開催で、皆さんそれぞれに用事があって委任状の提出者数が少し多かったかもしれませんが、役員会では出席者の安全を考えて明るい時間帯に開催することになりました。

村上市長、ご出席いただき有り難うございました！

少しでも多くの代議員の方に参加していただけるような配慮をしていきたいと思います。 出席いただいた代議員の皆さん、どうも有り難うございました

。6年度は、役員はすべて留任いたしました。就任2年目の田中五百喜会長のもとで一致団結して、コミュニティ事業を推進していきたいと思います。 令和6年度は、50年に一度の国スポも開催されますので、その支援・応援も見据えながら、かつ、これまで築いたものを大事にして事業展開ができたらと思います。 皆様のご協力を、よろしくお願いします！

令和６年度　第１回目の除草作業　４月１３日（土）

毎回、自分が作業をしていると、作業中の写真を撮り忘れてしまいます。草刈隊の頑張っているところもお届けしようと思うのですが、いつも情けない写真の提供になってしまいます。

この日は、9人参加して、11時頃に終了しました。

今回から、新メンバーが 1 人加わっていただきました。式浪の井上正春さんです。草刈の熟練者で、かつ元気さもあって、どんどんはかどっていきました。 防災広場草刈隊、安全に十分注意しながら、今年も元気いっぱい頑張りたいと思います。

＜＜ 編集後記 ＞＞

『高齢者の自己有用感』

渡邊校長がいつも話される「自己肯定感」と「自己有用感」について、さて、我々高齢者と言われる年代にとってはどう感じるのか？と、ちょっとだけ考えてみた。

高齢者の場合、「自己肯定感」の方は、それなりに人生を歩んできた歴史があるからなのか、多くの人は「誇り」という形になって持っていそうな気がする。人によっては、他人が思う以上に思っている人もいそうだ。

ただ、有用感となると、高齢者の現状では、まさしく十人十色でそれに対する意識も軽重まちまちになっているように感じる。

自分自身の思いを振り返ってみても、「人の体力、気力は個人差があるのに、なぜ定年という年齢でひとくくりにされるのか？今の社会は、多様性に重きを置くと言いながら、定年制には一番画一性が残っているじゃないか？」と、退職時には少し腹立たしく思ったりもした。

６０歳になったという理由だけでこれまで一生懸命やってきた仕事を取り上げられることに一種の理不尽ささえも覚えたりした。また、私とは反対に「やっと解放される」と思った人もいるだろう、感じ方は千差万別でいいと思う。 再任用の期間が終わったときには、それこそ「自己有用感」を全く感じず、喪失感でいっぱいになったと思う。 私は、体が動く間は何かをずっとやっていたいと思う。これからますます老いていくが、皆さんに理解されなくても、些細なことでもいい、何がしかの有用感は持って生きていたいと思う。それがないと寂しい。